

千葉県八千代市

# 市内遺跡発掘調査報告書

一本松前遺跡 c 地点

東山久保遺跡 b 地点

新東原遺跡 e 地点

新東原遺跡 f 地点

二重堀遺跡 g 地点

内野遺跡

持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点

平成17年度

八千代市教育委員会

## 凡 例

- 1 本書は、八千代市教育委員会が平成16年度市内遺跡調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、以下のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (調査面積/調査対象面積)	調査原因	調査担当者
1	一松前遺跡 c 地点	大和田新田字一本松前 127-1の一部	平成16年10月14日 ～ 平成16年10月29日	確認調査 上層 398㎡/3,300㎡ 下層 228㎡/3,300㎡	宅地造成	秋山利光
2	東山久保遺跡 b 地点	高田台字東山久保989-1 の一部	平成16年11月8日 ～ 平成16年11月26日	確認調査 上層 376㎡/2,978.07㎡	宅地造成	秋山利光
3	新東原遺跡 e 地点	勝田字新東原1280, 1283-21,284,1,291-8の一部	平成16年11月29日 ～ 平成16年12月28日	確認調査 上層 1,060㎡/9,574㎡ 下層 189.5㎡/9,574㎡	宅地造成	秋山利光
4	新東原遺跡 f 地点	勝田字新東原1271	平成16年12月8日 ～ 平成16年12月28日	確認調査 上層 119㎡/1,153㎡ 下層 12㎡/1,153㎡	宅地造成	秋山利光
5	二重瀬遺跡 g 地点	上高野字新林1212, 1213,1217-1,1217-2, 1217-3,1218-1,1218-3	平成16年12月30日 ～ 平成16年12月28日	確認調査 上層 328㎡/3,727.95㎡ 下層 8㎡/3,727.95㎡	共同住宅建設	森 竜哉
6	内野遺跡	吉橋字八幡前1176-1の 一画,1178-2の一部	平成17年1月7日 ～ 平成17年1月17日	確認調査 上層 240㎡/2823.26㎡	宅地造成	常松成人
7	村上字松業1193-2, 1195-2 正覚院跡 d 地点	村上字松業1193-2, 1195-2	平成16年7月1日	緊急調査 4㎡/1,242.22㎡	宅地造成	武藤健一

- 3 整理作業は、常松成人、森竜哉、秋山利光が担当し、平成17年度事業として下記の期間に実施した。  
平成17年11月21日～平成18年3月24日
- 4 本書の作図及び執筆は、第1章、第2章1、2、3、4、7を秋山利光、第2章5を森竜哉、第2章6を常松成人が行い、全体を秋山が編集した。
- 5 遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面、写真等の記録類は八千代市教育委員会が保管している。
- 6 本書で使用した地形図は、下記のを一部改変し、使用している。  
第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「佐倉」（平成10年発行）  
各遺跡の位置図 八千代市役所発行 1/2,500 八千代都市計画基本図（平成13年発行）
- 7 土層及び土器の色調の表記については、小山正忠・竹原秀雄「新版 標準土色帖 22版」による。

- 8 本書の遺物実測図における縮尺は土器 1/3, 石器 2/3, 鉄製品 1/3または2/3とした。
- 9 本書の記載方法は以下のとおりである。
- (1) 各遺跡の遺構ナンバーは調査の現地において使用したものをそのまま用いた。
  - (2) 各遺跡の土層は調査現場において記録した表記を変更し、Ⅰ層を表土層、Ⅱ層を腐食土層など、Ⅲ層をソフトローム層、Ⅳ層をハードローム層とすることとした。
- 10 持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点において出土した陶器について鳴田浩司氏の御教授を得た。
- 11 発掘調査から本書の刊行に至るまで、以下の諸機関・諸氏にご指導、ご協力いただきました。記して感謝します。(敬称略)

千葉県教育庁教育振興部文化財課, 陸上自衛隊下志津駐屯地, 村田一男(八千代市立郷土博物館長),  
中野修秀

# 目 次

凡 例

目 次

本文目次

挿図目次

図版目次

I 調査に至る経緯	1
II 各調査の概要	5
1. 一本松前遺跡 c 地点	5
2. 東山久保遺跡 b 地点	8
3. 新東原遺跡 e 地点	13
4. 新東原遺跡 f 地点	25
5. 二重堀遺跡 g 地点	28
6. 内野遺跡	31
7. 持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点	34
報告書抄録	巻末

# 挿 図 目 次

第1図 平成16年度市内遺跡調査位置図	4	第2図 一本松前遺跡位置図	5
第3図 一本松前遺跡 c 地点トレンチ配置図	5	第4図 一本松前遺跡 c 地点22トレンチ北壁土層	6
第5図 一本松前遺跡 c 地点出土遺物	6	第6図 東山久保遺跡位置図	8
第7図 東山久保遺跡調査状況	9	第8図 東山久保遺跡 b 地点遺構検出状況	10
第9図 東山久保遺跡 b 地点29トレンチ土層	10	第10図 東山久保遺跡 b 地点1号土坑 (01P)	10
第11図 東山久保遺跡 b 地点出土遺物	10	第12図 新東原遺跡位置図	13
第13図 新東原遺跡 e 地点遺構検出状況	14	第14図 新東原遺跡 e 地点G6-1トレンチ土層	14
第15図 新東原遺跡 e 地点 I 区出土状況	15	第16図 新東原遺跡 e 地点 I 区出土遺物	16
第17図 新東原遺跡 e 地点検出土坑	18	第18図 新東原遺跡 e 地点出土遺物	19
第19図 新東原遺跡 f 地点遺構検出状況	25	第20図 新東原遺跡 f 地点D1-1トレンチ西壁土層	25
第21図 新東原遺跡 f 地点検出土坑	26	第22図 新東原遺跡 f 地点出土遺物	26
第23図 二重堀遺跡位置図	28	第24図 二重堀遺跡 g 地点トレンチ配置図	29
第25図 二重堀遺跡 g 地点土層断面図	29	第26図 二重堀遺跡 g 地点トレンチ出土遺物	29
第27図 内野遺跡位置図	31	第28図 内野遺跡トレンチ配置図	31
第29図 内野遺跡A1-14-1トレンチ東壁土層	31	第30図 持田遺跡・正覚院館跡位置図	34

第31図	持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点緊急調査遺物出土地点	34
第32図	持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点緊急調査出土遺物	35

## 表 目 次

第 1 表	一本松前遺跡 c 地点出土遺物	6	第 2 表	東山久保遺跡 b 地点検出遺構	10
第 3 表	東山久保遺跡 b 地点出土遺物	11	第 4 表	新東原遺跡 e 地点1区出土遺物	15
第 5 表	新東原遺跡 e 地点検出遺構	17	第 6 表	新東原遺跡 e 地点土坑出土遺物	17
第 7 表	新東原遺跡 e 地点出土遺物	20	第 8 表	新東原遺跡 f 地点検出遺構	25
第 9 表	新東原遺跡 f 地点出土遺物	26			
第10表	持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点緊急調査出土遺物	35			

## 図 版 目 次

図版 1	一本松前遺跡 c 地点	7	図版 2	東山久保遺跡 b 地点	12
図版 3	新東原遺跡 e 地点(1)	22	図版 4	新東原遺跡 e 地点(2)	23
図版 5	新東原遺跡 e 地点(3)	24	図版 6	新東原遺跡 f 地点	27
図版 7	二重堀遺跡 g 地点	30	図版 8	内野遺跡	33
図版 9	持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点	35			

## I 調査に至る経緯

八千代市は千葉県北西部に位置し、都心まで約30キロメートルの距離にある。昭和29年1月に大和田町と睦村が合併して八千代町となり、その後阿蘇村の編入などを経て、昭和42年市制が施行された。

市域の発展は、昭和30年に八千代台団地の建設が全国に先駆けてはじまり、これにともない、京成本線には同31年に八千代台駅、同43年に勝田台駅が開業し、首都圏のベットタウンとして発展する足がかりとなった。その後、住宅団地は昭和43年に勝田台団地、同45年に米本団地、同47年に高津団地、同51年に村上団地が立て続けに完成し、市域の様相を一変させてきた。平成8年4月に東葉高速鉄道が開業し、さらにこの性格を強めている。

そうした状況の中、八千代市教育委員会では千葉県教育委員会の指導のもと、開発事業者からの「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会（以下「照会」と略）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち遺跡の範囲や性格について正確な資料を得ることが必要と判断される遺跡については、国庫と県費の補助を受け市内遺跡発掘調査事業として発掘調査を実施している。

以下は、平成16年度に市内遺跡発掘調査事業として発掘調査を実施した遺跡の調査に至る経緯である。

### 一本松前遺跡 c 地点

平成16年9月27日、興真乳業株式会社より市内大和田新田字一本松前127-1の一部他の21,853.51㎡について宅地造成のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況は工場及び山林であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地の一部は周知の遺跡の範囲内であり、隣接する区域がすでに平成15年に発掘調査が実施され縄文時代の遺構や旧石器時代の遺物が出土していることから、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。また、この区域以外は周知の遺跡の範囲外であったので、国道296号線側の台地上について試掘を実施した。しかし、遺構及び遺物を確認することができなかった。このため照会地の一部である舌状台地上の3,300㎡について確認調査が必要と判断し、10月7日その旨回答した。その後、この回答に沿って興真乳業株式会社と協議した結果、10月8日文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事のための発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出され、準備が整った10月14日に調査を開始した。また、同時にc地点の南西側でa地点西側の隣接地に排水処理施設を移転するため同社より、追加で照会が提出された。市教委の現地踏査により遺物が検出されなかったものの、a地点の調査成果をもとに、試掘を実施したが遺構、遺物を検出することができなかった。このため遺跡の広がりはここまで及んでいないものと判断された。これにより、今回の調査が実施されたことで同遺跡の範囲についてはほぼ全域で調査が完了した。

### 東山久保遺跡 b 地点

平成16年9月9日、染谷不動産株式会社より市内島田台字東山久保989-1の一部の2,978.07㎡について宅地造成のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況がアスファルト敷

きの駐車場であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去に隣接区域の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、9月27日その旨回答した。その後、この回答に沿って栄谷不動産株式会社と協議した結果、平成16年10月8日土木工事の届が提出された。準備が整った11月8日に調査を開始した。

### 新東原遺跡 e 地点

平成16年6月24日、株式会社 樹住宅より市内勝田字新東原1280他の9,574㎡（公簿上の面積）について戸建専用住宅地造成のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況は畑地であったが、遺物等の散布は確認できなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、7月2日その旨回答した。その後、この回答に沿って株式会社 樹住宅と協議した結果、8月20日土木工事の届が提出され、準備が整った11月29日に調査を開始した。

### 新東原遺跡 f 地点

平成16年11月10日、株式会社 樹住宅より市内勝田字新東原1271の1,153㎡（公簿上の面積）について戸建専用住宅地造成のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行い、現況が畑地であり、照会地が周知の遺跡の範囲内で、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、11月22日その旨回答した。その後、この回答に沿って株式会社 樹住宅と協議した結果、11月30日土木工事の届が提出された。すでに、同一事業者により隣接する e 地点の調査が開始されており、平行して調査を実施するための準備が整った12月8日に調査を開始した。

### 二重堀遺跡 g 地点

平成16年10月8日、大林住宅株式会社より市内上高野1212他の3,727.95㎡について共同住宅建設のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況は山林であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、10月13日その旨回答した。その後、この回答に沿って大林住宅株式会社と協議した結果、11月16日土木工事の届が提出され、準備が整った12月20日に調査を開始した。

### 内野遺跡

平成16年11月15日、株式会社 東洋リビングより市内吉橋字八幡前1176-1の一部他の2,823.26㎡について戸建住宅地造成のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況は荒

蕪地であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、遺構が検出される可能性があると考えられた。そのため、全域について確認調査が必要と判断し、平成16年11月22日その旨回答した。その後、株式会社 東洋リビングと協議した結果、12月6日土木工事の届が提出され、準備が整った平成17年1月7日に調査を開始した。

#### 持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点

平成16年2月13日、株式会社おゆみ野住宅より市内村上字松葉1193-2他の1,242.22㎡について宅地造成のための照会が提出された。照会地全域について確認調査が必要と判断し、同年2月20日その旨回答した。同年3月1日土木工事の届が提出され、準備が整った同年3月9日に調査を開始した。この確認調査は平成15年度市内遺跡調査事業として平成16年3月9日～18日の間行われ、近世以降の溝状遺構が2条検出され、縄文土器及び古墳時代から平安時代の土師器が若干出土し、調査を完了した。しかし、調査終了後の平成16年7月1日、宅地造成に伴う排水管理設工事中に人骨が発見されたため、事業主体者及び工事関係者の了承のもと、発見された周辺部分のみ、あらためて緊急調査を行った。

この緊急調査については平成16年度市内遺跡調査報告(注1)においてすでにその概要について報告されているが、今回出土遺物を中心に報告する。

(注1) 八千代市教育委員会 2005 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」





第1図 平成16年度 市内遺跡調査位置図 (1/50,000)

0 20m

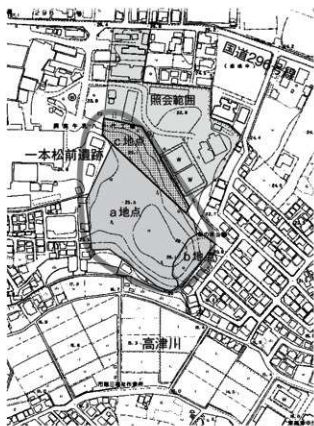
## II 各遺跡の概要

### 1. 一本松前遺跡c地点

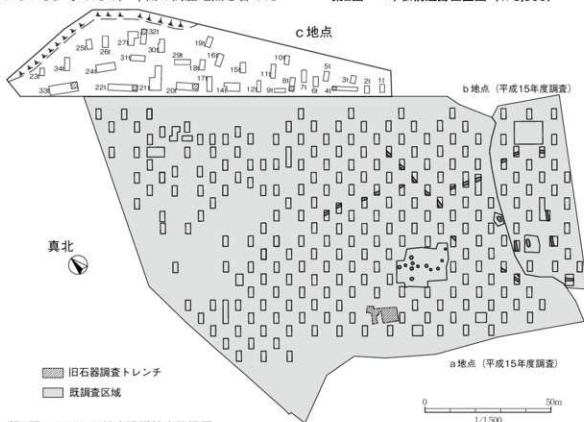
#### 遺跡の立地と概要

一本松前遺跡は八千代市西部に位置し、高津川を南に臨む舌状台地上の標高20m～26mに立地している。この舌状台地は高津川に対して南東方向に突き出た台地となっており、台地の東側から北側にかけて小谷津が廻りこんでいる。周辺は開発などに伴う試掘調査が数多く行われているが、遺構等はほとんど確認されていない、遺跡の希薄な区域となっている。

本遺跡は平成15年度にa地点及びb地点の2ヶ所の調査が行われている(注1)。また、第1章「調査に至る経緯」でも触れられているように、a地点の西側に隣接する地点でも試掘が行われ、遺構遺物が確認されていない。そのため、遺跡の範囲がa地点西側までは及んでいないことが明らかとなっている。そのため、今回の調査地点を含めた



第2図 一本松前遺跡位置図 (1/5,000)



第3図 a, b, c地点遺構検出状況図

3地点でこの遺跡のほとんど全てが調査されることとなり、一本松前遺跡はすべて記録保存されることとなった。今回の調査区域は遺跡の北側の斜面にあたる。現況は雑木林が残存していた。

### 調査の方法と経過

調査方法はa地点調査時の基点となった石杭が残存していたため、ここを基点にトレンチの設定を行う予定であったが、残存する樹木のため、a地点と同様なトレンチの設定及び掘削ができなかった。そのため、やむを得ず任意にトレンチを設定して調査を実施した。

調査は平成16年10月14日～10月29日の期間行っている。10月14日器材搬入、測量用基線の設定・トレンチ設定、15日～25日重機によるトレンチ表土掘削作業を行った。作業は雨天による中止も多かったが、樹木間が狭くバックホーの移動が制約されたことにより時間がかかっている。19日～25日確認面の清掃により遺構検出作業、26日～28日落ち込みの調査及び実測・撮影等記録作業、27日～28日下層調査、29日器材撤収により調査を終了した。

### 調査の概要

調査区の土層はI層が表土層、II a層黒褐色土層、II b層褐色土層、II c層ローム漸移層、III層ソフトローム層、IV層ハードローム層に分層される。ソフトローム上面を遺構確認面として調査を行った。

調査はトレンチにより実施したが、調査区域の東側に樹木が密集していたこと

もあり、遺構が検出された場合トレンチの拡張や追加ができないと判断されたため、当初より可能な限り掘削することとし、398㎡のトレンチ調査を行った。また、旧石器時代については2m×2mを基本とする下層調査を228㎡行なった。

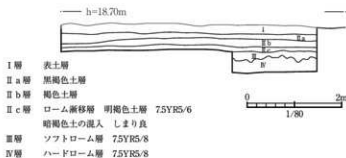
調査区域内で不鮮明ではあったがシミ状の落ち込みが9ヶ所ほど検出された。半截やサブトレンチの調査により、すべて遺構とは判断されず、風倒木などの攪乱とみられた。遺物は縄文土器が2点出土しているが、掘削した廃土中からの出土であった。また、下層の調査では石器の出土はなかった。

第1表 トレンチ出土遺物観察表 (第5図)

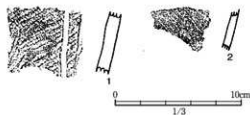
BSRNo.	出土地点	種類・器種・部位	施文	口径・底径・高さ(cm)	色調・粘土	備考
1	4トレンチ 廃土中	縄文土器 深鉢 胴部	LRの縄文を地文に沈線による懸垂文を2本	—	表 におい赤陶 (5YR5/3) 石英砂粒	加曾利E1式
2	23トレンチ 廃土中	縄文土器 深鉢 胴部	縄文がわずかに見られる。懸赤の	—	表 におい赤陶 (5YR5/3) 砂粒	

### 調査のまとめ

今回のc地点の調査では、遺構の検出はなかったが、縄文時代中期加曾利E1式などの土器がわずか2点出土している。



第4図 c地点22トレンチ北壁土層



第5図 c地点出土遺物

前述のごとく、今回の調査により本遺跡の全域が調査されることとなった。その概要をまとめてみると、旧石器時代では、遺跡の南側斜面のソフトローム中から散漫ではあるが旧石器の出土地点が1ヶ所確認されている。石器の内容は総数11点で、ナイフ形石器や使用痕がみられる剥片、叩き石などが出土している。石材は長野産や伊豆産の黒曜石や黒色頁岩、白滝頁岩、砂岩、メノウなどであった。

縄文時代の遺構は遺跡の南側、台地の先端の平坦面において、前期黒浜期を中心とする土坑が12基、また時期は不明であるが落とし穴が2基検出されている。遺跡から出土した土器は前期黒浜式、中期加曾利E式、後期堀之内式、安行1式などが出土している。

その他用途などはわからないが、近世以降とみられる6~7条の溝状の遺構が検出されている。

(注1) 八千代市教育委員会 2005 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』

図版1 一本松前遺跡c地点



(1) 調査区域近景



(2) 調査風景



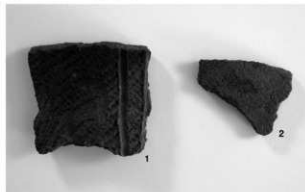
(3) 22トレンチ北壁土層



(4) 22トレンチ深掘状況



(5) 調査区状況



(6) 出土土器

## 2. 東山久保遺跡 b 地点

### 遺跡の立地と概要

東山久保遺跡は市域の北端に位置し、印西市などとの市境を流れる神崎川の南岸の台地上に立地している。この遺跡は水田面からの比高差が10m程の北側に突き出た舌状台地上の標高20m～22mに所在する。この舌状台地は神崎川に面する周辺の台地から300mほど奥まって位置している。

本遺跡の大半は、すでに大学建設を含む大規模開発に伴い昭和60年9月に確認調査が行われ、昭和62年1月29日から同年12月3日までに3次にわたって本調査（a地点）が実施されている。この調査は整理作業が実施できなかったため詳細については不明な部分が多いが、堅穴住居跡では縄文時代中期7軒、弥生時代後期6軒、弥生時代後期～古墳時代前期5軒、古墳時代後期13軒などが検出されている（注1）。

今回の調査区域はこのa地点の南側に接している。現況がアスファルト敷きの駐車場であり隣接地は大学の敷地や市道などと現況の変化が激しく、また、本遺跡の東側に入り込む谷津も平坦に埋め戻されてしまっていたため、本来の地形を推定することは困難な状況であった。しかしながら、今回の調査地点が台地の付け根部分に位置し、弥生時代から古墳時代の集落の一部が検出される可能性が高いものと予想された。

### 調査の方法と経過

調査方法は、事業者からの要請として調査終了後しばらくは現状に復して駐車場として利用する必要から、調査トレンチを通路以外の各駐車スペース内に限定して設置するよう求められた。そのため、2m×4mの調査トレンチを各駐車スペース内に任意な設定とすることとした。また、調査には事前にアスファルトを切断する必要があったため、追加トレンチが生じないよう、当初より全体の把握が可能なトレンチの



第6図 東山久保遺跡位置図 (1/5,000)



第7図 東山久保遺跡調査状況

設定に努めた。しかし、正確を期すためトレンチの拡張を一部行っている。

調査期間は平成16年11月8日～26日であった。11月8日トレンチ設定、アスファルトの切断、測量のための基線設定、9日～16日重機によるアスファルトや盛土、表土掘削作業、16日～18日遺構検出作業、遺構調査、17日～22日実測・撮影等記録作業、22日器材撤収、26日重機によるトレンチの埋め戻し作業をもって調査を終了した。

### 調査の概要

調査区は削平や盛土により整地され、駐車場として整備されていた。調査区の北側ではローム面まで削平されていたが、南側は盛土が厚く堆積していた。また、山林の伐採により出た木材等の焼却のための大きな穴が掘られた跡が随所に見られた。調査区中央の29トレンチの土層では、現地表面となっている駐車場のアスファルト面から約80cm

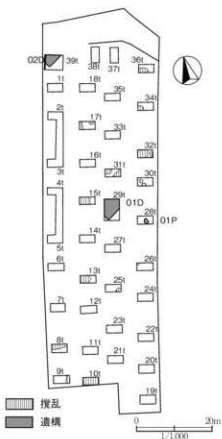
の盛土が確認され、いちばん南側の19トレンチでは2m程の深さの盛土層が確認されている。

基本土層はI a層からI d層までが盛土層と駐車場整備のためのアスファルト舗装であった。I e層は黒褐色土層であり、旧表土層である。いまだ当時の木の根も残存していた。II a層は黒褐色土層、II b層は暗褐色土層、III層はソフトローム層である。場所によっては一部攪乱を受けていたが、III層が全体に残っており遺構確認面とした。

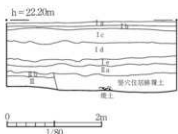
調査により確認された遺構は竪穴住居跡が2軒、土坑が1基検出されている。覆土中から出土する遺物は古墳時代の土師器の少破片がみられ、遺構の時期は同時期のものと判断された。

竪穴住居跡は北側に位置する39トレンチと調査区中央の29トレンチの2ヶ所から検出されている。39トレンチから検出された竪穴住居跡は西側の半分が調査区域外になるものとみられた。また、検出面がハードローム面であり、かなりの厚さで表土以下の土層が削平されたものと考えられた。29トレンチの竪穴住居跡は70cm～80cmほどの盛土の下に旧表土等の土層が確認され、現地表下約110cmでソフトローム上面を確認することができた。確認トレンチが竪穴住居を掘りぬいていたため約30cmの深さが確認できた。

トレンチから出土した土器は総数で47点であった。出土状況は各トレンチから散漫に出土し、まとまりはみられない。縄文土器は前期末から晩期までの時間幅がみられ、23点であった。土師器は20点ほどであるが、小破片がほとんどであった。

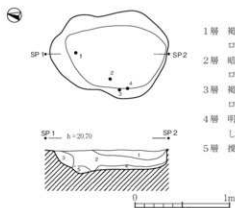


第8図 b地点遺構検出状況



第9図 b地点29トレンチ土層

- 1a層 アスファルト
- 1b層 砂石層
- 1c層 ロームを主体とした盛土層
- 1d層 白色粘土を主体とした盛土層
- 1e層 黒褐色土層 (田丸土) 7.5YR3/2
- Ⅱa層 黒褐色土層 7.5YR3/1
- Ⅱb層 暗褐色土層 7.5YR3/4
- Ⅲ層 ソフトローム層 7.5YR5/8



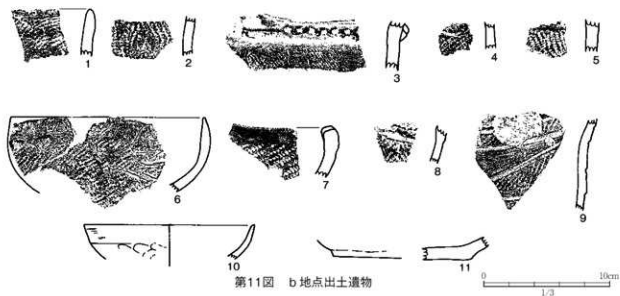
第10図 1号土坑(O1P)

- 1層 褐色土層 7.5YR4/6 暗褐色土を多  
ローム粒少 しまり良 密度中
- 2層 暗褐色土層 7.5YR3/4 褐色土をまばら  
ローム粒少 しまり良 密度中
- 3層 褐色土層 7.5YR5/4 暗褐色土を少  
ローム粒少 しまり良 密度中
- 4層 明褐色土層 7.5YR5/6 暗褐色土を少  
しまり良 密度中
- 5層 擾乱

第2表 b地点遺構一覧表

( ) 推定 ( ) 現存

遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	検出位置	備考
		長軸	短軸	深さ					
O1P	土坑	124	91	30	長楕円形	N-20° -W	掘坑	28トレンチ	古墳時代 土師器4点出土
O1D	竪穴住居跡	(450)	(450)	—	方形?	N-31° -W	—	29トレンチ	古墳時代
O2D	竪穴住居跡	(500)	(400)	—	方形?	N-32° -W	—	39トレンチ	古墳時代



第11図 b地点出土遺物

## 1号土坑(01P)(第10図)

1号土坑は28トレンチで検出され、確認面はローム面であった。確認面の上層には約30cmの黒褐色土(Ie層・旧表土層)が残存していたが、その上にはアスファルト舗装まで150cmほど盛土されていた。形状が楕円形で深さ20cmほどである。土坑の覆土は自然埋没とみられる。出土遺物は土師器の少破片ばかりであったが、土師器の底部(第11図11, 第3表11)が出土している。

第3表 b地点出土遺物観察表(第11図)

( ) 復元

図版No.	出土地点	種別・器種・部位	施文等	口径・底径・高さ(cm)	色調・粘土	備考
1	32トレンチ	縄文土器 深鉢 口縁部	無施文 口唇部に縄文原体の残痕(L)	—	表 におい・濁(75YR5/4)	前期末葉
2	32トレンチ	縄文土器 深鉢 胴部	単施	—	表 明赤陶(5YR5-6)	前期末葉か
3	表 様	縄文土器 深鉢 胴部	横位の隆起線文に連続的に指頭圧痕 胴部には結節縄文(L)を縦位に施文	—	表 菊灰(75YR5/1) 0.5~1mm大の白色砂粒多い	五領ヶ台
4	35トレンチ	縄文土器 深鉢 胴部	縄文LRを横位	—	表 におい・濁(75YR6/3) 白色砂粒多い	五領ヶ台
5	39トレンチ	縄文土器 深鉢 胴部	横位の沈線文に縄文LRを施文	—	表 菊灰(75YR4/1)	加曾利EⅢ
6	27トレンチ	縄文土器 鉢 口縁	口唇部は無文で、 胴部には縄文LRを施文	(15.4) ———	表 灰褐(75YR6/2) 石英砂粒	加曾利EⅢ
7	10トレンチ	縄文土器 深鉢 口縁	口縁下ミガキによって無文。縄文LRを 横位に施文する。波状口縁になる。	—	表 におい・濁(75YR5/4) 砂粒	加曾利EⅢ
8	30トレンチ	縄文土器 深鉢 胴部	横位の沈線。縄文LRを縦位に施文	—	表 赤褐(5YR4/8) 白色砂粒	加曾利EⅢ
9	4トレンチ	縄文土器 深鉢 胴部	縄文LR。半段竹管により区画	—	表 におい・濁(75YR6/3) 雲母わずか	晩期か
10	27トレンチ	土師器 高坏 口縁	口縁ナデ、体部ケズリ、両面赤彩	(13.6) ———	表 赤褐(25YR4/8) 白色砂粒	古墳時代 後期
11	1号土坑 No.1	土師器 釜 底部		—(10.4)—	表 におい・黄橙(10YR7/4) 砂粒	古墳時代

## 調査のまとめ

今回の調査で明らかになったことは以下のとおりである。

縄文時代では遺構は検出されていないが、土器としては前期末葉、中期初頭の五領ヶ台式、加曾利EⅢ式、晩期などが出土している。a地点で中期の竪穴住居跡が検出されていることもあり、b地点にこの時期の遺構は確認できなかったが、縄文時代の主体となる時期であるとみられる。

古墳時代では竪穴住居跡が2軒と土坑が1基検出された。本遺跡の集落の主体は前期、後期の時期であり、とりわけ後期の竪穴住居跡が最も多くなるようだが、今回検出された遺構も同様の時期と判断される。a地点の調査が残念ながら未整理のため、現段階で集落の全容を明らかにすることはできないが、今回の調査により、遺跡南半の部分が明らかとなってきたといえる。

(注1) 八千代市教育委員会 1996 『平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報』



図版2 東山久保遺跡b地点



(1) 調査区域近景



(2) 調査風景



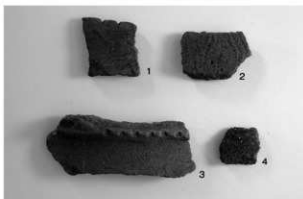
(3) 調査区基本土層



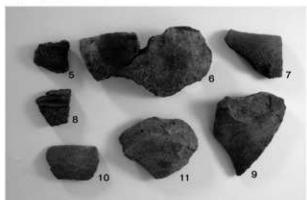
(4) 遺構検出状況



(5) 遺構検出状況



(6) 出土土器①



(7) 出土土器②



(8) 1号土坑

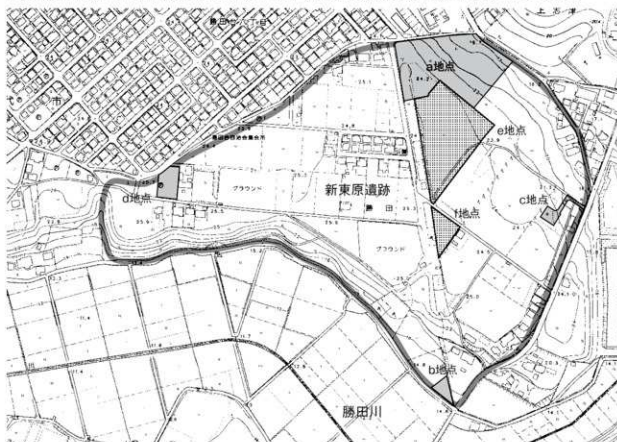
### 3. 新東原遺跡e地点

#### 遺跡の立地と概要

新東原遺跡は、八千代市南東部で佐倉市及び千葉市との市境付近に位置している。勝田川の北岸の舌状台地上に立地する。この舌状台地は南側を勝田川、東側から北側にかけて勝田川から入り込む谷津によって開析されている。遺跡の広がり、台地上平坦部を主体として緩斜面から低位段丘まで及んでいる。台地上の標高は約22m～25m、低位段丘の標高は約15m～18mである。

新東原遺跡では、これまでに4地点において調査が実施されている。a地点は遺跡の北端、勝田川の支流から入り込む谷津を臨む台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。平成13年度に市教委によって確認調査(注1)が行われ、それをもとに平成15年度に本市遺跡調査会によって本調査が実施された。この調査により縄文時代後期加曽利B式期と近世以降の土坑群等が検出されている(注2)。b地点は遺跡の南端、勝田川を臨む低位段丘上に位置している。平成14年度に市教委によって確認調査が実施され、縄文時代後期後半の竪穴住居跡1軒が検出されている(注3)。c地点は遺跡の東端、台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。平成14年度に市教委によって確認調査が実施され、遺構は検出されなかったものの、縄文時代後期と思われる土器片が数点出土している(注3)。d地点は遺跡の西端、標高約25mの台地上平坦部に位置している。水田面との比高差は14mほどである。遺構は確認できなかったが、縄文土器片2点と石鏃1点が出土した(注4)。

今回の調査区e地点はa地点の南側に隣接し、区域全体が標高24m前後の平坦面で、現況は畑地となっていた。隣接するa地点では斜面部において縄文時代後期の加曽利B式期の遺構遺物が検出されているが、台地上の平坦部からは近代以降の土坑が検出され、遺物も踏鉄や素焼の土器片などが出土していた。

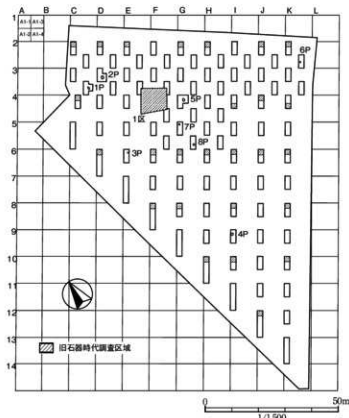


第12図 新東原遺跡位置図 (1/5,000)

## 調査の方法と経過

調査の方法は、調査区の形状に合わせて任意に10mのグリッド(方眼)を組んだのち、これにあわせて2m×5mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に1,060mについて表土除去・遺構検出作業を行った。また、旧石器時代調査のため上層の調査トレンチの一部に2m×2mのトレンチを適宜設定し人力により掘り下げ、遺物の検出に努めた。当初北側より調査を開始したが、時間の都合により、南側半分の調査トレンチについてはバックホーによりロームを薄くはざながら、随時廃土したローム土を精査することにより調査を実施し、最終的に116㎡の掘削を行った。その中でF4-1グリッドのローム中より黒曜石片が出土したため、周辺77.5㎡(以下「1区」と呼称する。)についてハードロームまで掘削し、遺物の広がりを確認した。

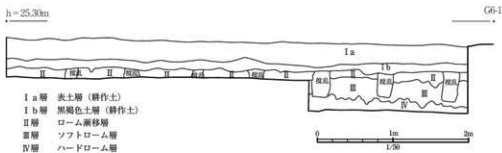
調査は平成16年11月29日～12月28日まで実施した。11月29日器材搬入、地境の杭を基点(C4)に基線設定、30日トレンチ設定開始、12月2日～3日重機によるトレンチ表土除去作業、6日～9日遺構検出作業、9・10日セクション実測・撮影等記録作業、10日～16日検出遺構の調査、13日～22日人力による旧石器時代調査トレンチ掘削作業、22日～27日F4-1周辺(1区)を拡張し調査を行う。22日～27日重機によるトレンチ埋め戻し作業、28日器材撤収により調査を終了した。



第13図 e地点遺構検出状況

## 調査の概要

調査区の現況は畑地で、基本土層はI a層表土層(耕作土)、I b層黒褐色土層(耕作土)、II層ローム漸移層、III層ソフトローム層、IV層ハードローム層(旧耕作土)。

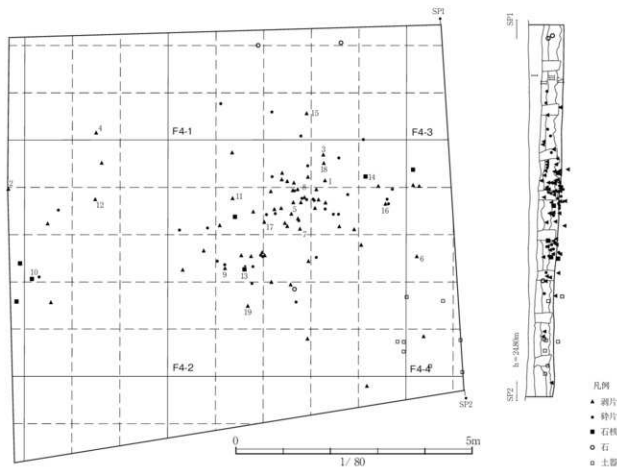


第14図 e地点G6-1トレンチ西壁土層

II層ローム漸移層、III層ソフトローム層と、IV層ハードローム層に分層された。ソフトローム層にまで耕作による攪乱を受けているが、ソフトローム上面を遺構確認面として調査を行った。

**旧石器時代** 1区は一辺約9mほどの範囲の中から遺物が出土している。石器は総数100点で、土器も8点ほど混入していたが、耕作機械による攪乱がIII層にまで及んでいることによるものとみられる。

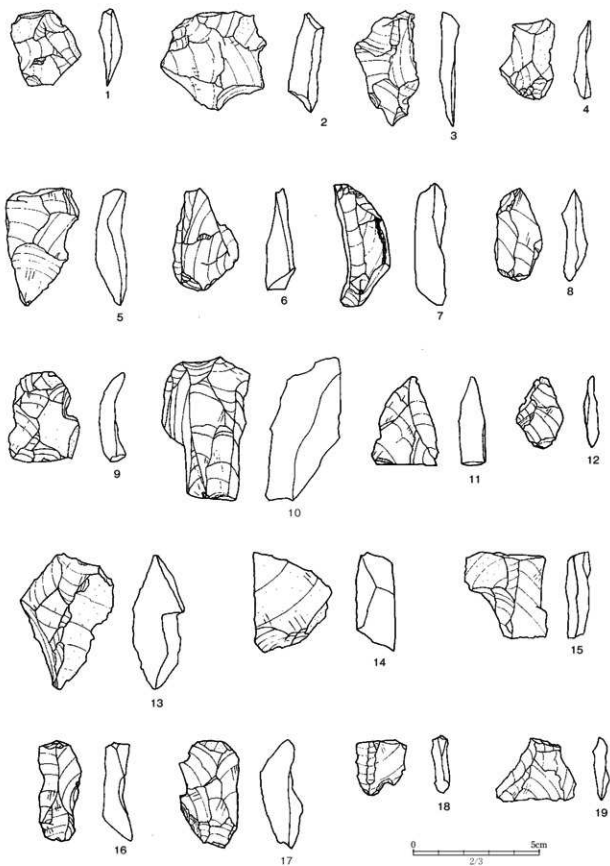
遺物の概略は剥片が59点、石核が7点、碎片が34点出土した。その他に自然石3点も含まれていた。



第15図 e地点1区出土状況

第4表 1区出土遺物(第16図)

図版No.	出土No.	種別	石材	特徴	縦・横・厚み(mm)	重量(g)	備考
1	45	剥片	黒曜石	風化面が一部に見られる	30・25・7	5.7	aブロック
2	38	剥片	黒曜石		40・40・11	17.4	bブロック
3	48	剥片	黒曜石		46・23・5	5.4	aブロック
4	36	剥片	黒曜石	風化面が一部に見られる	32・21・5	3.3	bブロック
5	75	剥片	黒曜石		47・29・12	12.2	aブロック
6	53	剥片	黒曜石		41・26・11	9.0	aブロック
7	28	剥片	黒曜石		49・17・	11.2	aブロック
8	30	剥片	黒曜石		37・19・8	4.1	aブロック
9	5	剥片	黒曜石	風化面が一部に見られる	36・28・6	7.8	aブロック
10	20	石核	黒曜石		58・33・27	45.8	bブロック
11	4	剥片	黒曜石		36・27・10	8.7	aブロック
12	1	剥片	黒曜石	風化面が一部に見られる	29・19・5.5	1.7	bブロック
13	87	石核	黒曜石	風化面が一部に見られる	54・37・21	25.1	aブロック
14	61	石核	黒曜石		40・31・15	19.9	aブロック
15	77	剥片	黒曜石	風化面が一部に見られる	33・31・9	8.2	aブロック
16	104	剥片	黒曜石		40・14・6	5.1	aブロック
17	93	剥片	黒曜石		43・24・13	12.7	aブロック
18	63	剥片	黒曜石		23・20・6	2.5	aブロック
19	86	剥片	黒曜石		25・32・5	3.1	aブロック



第16図 e地点1区出土遺物

これらの石器には風化した自然面の、みられるものが多い。石材は自然石以外すべて黒曜石であった。

出土層位はⅢ層からⅣ層にかけて出土している。耕作機械による攪乱も多く受けているため、本来の層位・位置にあるものではないものも含まれているが、もともとの層位・位置で出土する石器も数多くあり、全体としては同一の石器群であると判断される。

集地点は大きく2ヶ所みられる。F4-1グリッドを中心とした約4m範囲に出土し、石器の密度の高い地点（aブロック）とE4-3グリッドの約3m範囲に散漫に出土する地点（bブロック）がある。aブロックでは総数88点出土している。内訳は石核が4点、剥片51点、破片32点、自然石1点であった。bブロックでは総数11点出土している。内訳は石核3点、剥片6点、破片2点である。その他ブロックに含まれなかった遺物は12点あり、剥片2点、自然石2点、土器8点であった。

**遺構** 調査区域内の遺構確認で45ヶ所ほど落ち込みを確認した。半蔵やサブトレンチによる調査では、人為的な遺構と判断できないものが多かった。最終的に8基に人為性があるものと判断し、調査を実施した。これらの土坑は調査区全体に散漫に検出されており、時期や使用目的等について明らかとなるものはなかった。4号土坑から唯一弾子と弾環が1点ずつ出土しているが、この土坑に伴うものとは考えにくい。

**遺物** 調査区域内で出土した遺物はきわめて少なかった。土器の出土は総数で19点であったが、特に集中する地点はなかった。旧石器の調査で出土した1区の8点の土器はF4-3グリッドにややまとまる傾向がみられる。いずれも耕作機械による攪乱内からの出土であったため、元の位置そのものではないが近接してあったものと思われる。この8点は第18図1、3、4ほか5点であり、いずれも後期堀之内2式であった。また、後期加曽利B式（第18図5）とみられる土器が出土している。

調査区全域で第18図7～18のような金属製の玉が出土している。当初、近世の火縄銃などによる鉄砲の弾丸ではないかとの推測もなされたが、表採された砲弾の信管（19）や弾体（21、22）などが出土しているところからみて、砲弾の一部であると判断した。これらはその弾子にあたる。e地点全体では4号土坑から出土した1点を含め、49点出土している。特に集中する傾向はみられず、遺跡全体に散らばって出土する。形状は球形であるが、製作時の切り離した痕跡や、型を上下にあわせた時にはみ出したバリ状の

第5表 e地点検出遺構（第17図）

（ ）推定 （ ）現存

遺構No.	種別	規模(cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	検出位置	備考
		長軸	短軸	深さ					
01P	土坑	86	73	32	楕円形	N-05° -E	皿状	C3-4	
02P	土坑	121	90	21	楕円形	N-47° -E	凹凸	D3-1	
03P	土坑	47	38	12	ほぼ円形	—	皿状	E6-1	
04P	土坑	107	99	53	ほぼ円形	—	箱状	I9-1	弾子1点、弾環1
05P	土坑	116	87	18	不整形	N-6° -E	皿状	G4-1	
06P	土坑	42	36	65	ほぼ円形	—	柱状	K2-4	
07P	土坑	59	46	12	楕円形	N-25° -E	皿状	G5-1	
08P	土坑	74	65	11	ほぼ円形	—	皿状	G5-1	

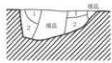
第6表 土坑出土遺物（第17図）

遺構No.	出土地点	種別	特徴	大きさ(mm)	重量(g)	備考
1	4号土坑 No.1	弾子	はみ出し痕、切り離し痕がみられる。一部平皿にカットされている。	径14	103	

1号土坑 (01P)



SP1 h = 24.80m SP2



1層 褐色土層 75YR4/4  
明褐色土をまばらに混入  
しまり貝 密度密  
2層 明褐色土層 75YR5-6  
しまり貝 密度密

2号土坑 (02P)



SP1 h = 24.80m SP2



1層 暗褐色土層 75YR3/4  
褐色土をまばらに混入  
ローム粒少 しまり貝 密度密  
2層 褐色土層 75YR4/4  
ローム粒少 しまり貝 密度密

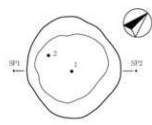
3号土坑 (03P)



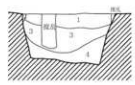
h = 24.80m  
SP1 SP2



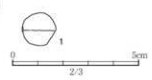
1層 褐色土層 75YR4/4  
ローム粒少 しまり貝 密度密  
2層 褐色土層 75YR4/6  
ローム粒少 しまり貝 密度密



SP1 h = 24.90m SP2

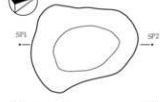


4号土坑 (04P)

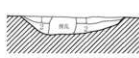


1層 明褐色土と黒褐色土との混土層  
75YR5-8 75YR3/1  
ロームと黒色の混土  
ロームフロック多く混入 しまり貝  
2層 明褐色土層 75YR5-8 しまり貝  
3層 暗褐色土層 75YR3/2  
ローム粒 小フロックまばら  
しまり貝 密度密  
4層 暗褐色土層 75YR3/3  
褐色土を全体に混入 しまり貝 密度中

5号土坑 (05P)



SP1 h = 24.60m SP2



1層 褐色土層 75YR4/3  
しまり貝 密度密  
2層 褐色土層 75YR4/6  
しまり貝 密度密

6号土坑 (06P)

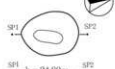


h = 24.90m  
SP1 SP2



1層 暗褐色土層 75YR3/2  
褐色土を若干混入  
しまり貝 密度中  
2層 褐色土層 75YR4/6  
ローム粒含む  
しまり貝 密度中

7号土坑 (07P)



SP1 h = 24.80m SP2



1層 暗褐色土層 75YR3/2  
ローム粒含む しまり貝 密度密  
2層 暗褐色土層 75YR3/4  
しまり貝 密度密

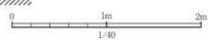
8号土坑 (08P)



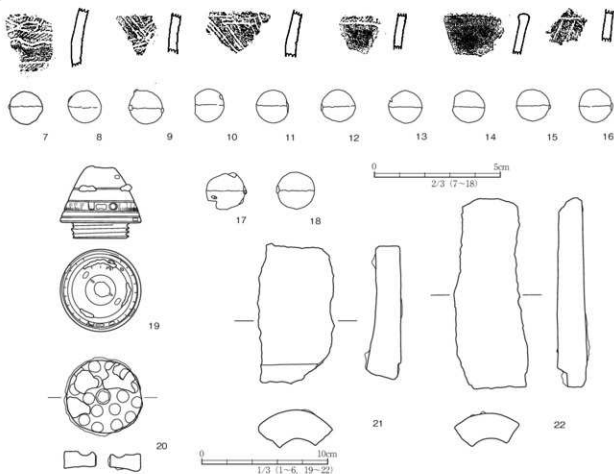
SP1 h = 24.80m SP2



1層 暗褐色土層 75YR3/2  
褐色土を多く混入 しまり貝  
2層 暗褐色土層 75YR3/3  
しまり貝 密度密



第17図 e 地点検出土坑



第18図 e地点出土遺物

ものを残すものが多い。着弾時にできた破損の抉れもあるが、一部分を平らに削っているものもみられる。重さは8.0gとやや軽めのものも1点あるが、ほとんどが9.5～10.5gに調整されている。17、18の2点だけはやや大きく16g前後になっている。重さの調整は弾子の一部を削ることにより調整しているものと考えられる。21は砲弾の信管である。その特異な形状や仕組みから、大正期に開発された「三年式複動信管」(注7)である。信管中央に2段の可動リングがあり、下段のリングには0から22の目盛が刻まれている。爆発のタイミングを測定するもので0秒から22秒まで調整できたようである。また、周囲には規則的につけられた凹みがあり、時間設定するときに機材をあてがうためのものであろうか。内側には径が15mmほどの空洞があり内部に発火する仕組みや火薬などが詰められていたのだろう。この信管は近代初頭において砲弾の主流であった榴散弾に用いられた時限式の信管である。榴散弾は砲弾の内部に多数の弾子を持ち、着弾直前に砲弾の後方にある炸薬が爆発し、弾子を前方に放出する構造となっているものである。

20は弾体内部に付けられた弾子を支える部品のようなものである。中央にあいている穴は信管の発火を砲弾後部に詰められた炸薬に伝えるための導管が通っていたものとみられる。21、22は砲弾の弾体とみられる。同様の弾体は全体で9点出土している。径を復元すると70mmから76mmほどの砲弾と推定された。

実測図では表現できなかったが、図版5(5)のような部品も見つかっているが、砲弾後部につけられた弾帯(環)とみられる。

#### 調査のまとめ

新東原遺跡は遺物の散布が非常に希薄な地域で、遺物の表採も容易ではない遺跡であることは前々から



指摘されてきたが、最近増加した開発とそれに伴う発掘調査により、この遺跡の様々な様相が明らかとなってきた。

旧石器時代の遺物の出土は、本遺跡においてはじめてである。黒曜石を主体とする石器群で、出土層位は、擾乱の影響もあるがソフトロームからハードローム上部にかけて出土している。9m四方の中に二つ

第7表 e地点出土遺物(第18図)

( ) 推定 ( ) 現存

図版No	出土地点	種別・器種・部位	施文	口径・底径高さ(cm)	色調・胎土	備考
1	1R9	縄文土器 深鉢 胴部	沈線により区画し、LRの縄文を充填	—	表 暗赤(10R3/4) 石英砂粒	縦ノ内2式
2	表採	縄文土器 深鉢 胴部	沈線により区画され、磨消縄文	—	表に灰褐色(10YR5/4) 石英砂粒	縦ノ内2式
3	1R10	縄文土器 深鉢 胴部	沈線により区画され、磨消縄文	—	表に灰褐色(10YR5/4) 石英砂粒	縦ノ内2式
4	1R41	縄文土器 深鉢 胴部	沈線により区画され、磨消縄文	—	表に灰褐色(10YR5/4) 石英砂粒	縦ノ内2式
5	表採	縄文土器 深鉢 口縁	ミガキ	(14) ----	表に灰褐色(10YR5/4) 石英砂粒	加曾利B式か
6	F7-1	縄文土器 深鉢 胴部	沈線	—	表 黄橙(10YR8/6)	

図版No	出土地点	種別	特徴	大きさ(mm)	重量(g)	備考
7	G5-1	弾子	はみ出し痕、切り離しも2ヶ所。	径14	99	
8	F3-4	弾子	はみ出し痕がわずかにみられる。	径13	104	
9	F8-1	弾子	はみ出し痕、切り離し痕が2ヶ所みられ、上方に突起もみられる。	径13	104	
10	H5-1	弾子	はみ出し痕、切り離し痕がみられ、一部平坦にカットされている。	径13	100	
11	D4-1	弾子	はみ出し痕、一部平坦にカット。	径13	100	
12	表採	弾子	はみ出し痕、切り離し痕がみられる。	径14	98	
13	1R	弾子	はみ出し痕、一部快れている。	径13	99	
14	G9-1	弾子	はみ出し痕、一部平坦にカット。	径13	102	
15	表採	弾子	はみ出し痕、切り離し痕がみられる。	径13	101	
16	K5-1	弾子	はみ出し痕、切り離し痕がみられる。	径14	99	
17	H6-1	弾子	はみ出し痕、切り離し痕がみられ、2ヶ所大きく快れる。	径16	155	
18	I4-1	弾子	はみ出し痕、切り離し痕がみられる。	径15	163	
19	表採	信管	下部に弾体と接合するためのネジがつけられ、中央部には可動したとみられるリングが2本、下のリングには0~22までの目盛りがつけられている。内部中央は空洞になる。先端は凹んでいる。	高さ(56) 径 66	5635	
20	D3-1	弾体の一部	弾体の後につけられた部品か、弾子を弾き上げるための凹みが均等に配されている。さびにより一部不明、内側に6個、外側に12個ある。中心には孔があり、弾体の中心に導管を通すためのもの。	径(61)	2188	
21	K12-1	弾体(破片)	破片下部に段差をつける。弾体後部であろうか。	径(70~76)	5940	
22	K11-1	弾体(破片)	破片下部に段差が見られる。弾体後部か、内側下部には弾底部分をはめ込むための快りか。	径(70~74)	6217	

のブロックが検出され、それぞれに石核様の石材を含んでいる。いずれのブロックにも明瞭な石器は含まれていないようである。黒曜石には斑晶が多くみられる。

縄文時代では遺構はまったく確認されていないが、後期縄文之内2式と加曾利B式の小破片がわずかに出土したのみであった。

今回の調査においては、信管、弾体、弾帯、弾子など砲弾に関連したものが多く出土した。隣接地であるa地点(注2)においても「金属製の玉」が確認されており、さらに、周辺でこの種の「金属製の玉」が数多く出土しているという話もあった。まさに、この地域が砲弾の着弾地点になっていた様相が伺え、隣接する下志津野戦砲兵射撃学校や射撃演習場との関連が想定される。

旧陸軍の射撃演習場は佐倉藩の砲術練習所として設けられた「下志津原火薬場」を基礎にして、明治6年(1873)砲術の伝習を行う目的でフランスからルボン砲兵大尉を招聘し、同時に南北3,000m、東西300mに拡張された。明治19年(1886)陸軍砲兵射撃学校が創設されて以降、度重なる拡張を経て広大な演習場となっていった。それは下志津原ばかりでなく六方野や三角原にまで拡張されていった。

この下志津原演習場では、「三十一年式速射野砲」や「三八式野砲」の6,500mから8,300mほどの比較的射程の短い砲の射撃試験ばかりでなく、最大射程10,000mを越す「九五式野砲」の射撃も行われている(注5)。また、射撃の方向も部隊の規模や演習方法により各方向から行われ、六方野及び三角原を含む下志津原一帯すべてが着弾地点となっていた(注6)。新東原遺跡は下志津原に隣接する勝田に所在しているが、今回出土した砲弾は着弾がそれのものなのか、あるいは演習場の一部としてあらかじめ目標となっていたのであろうか。いずれにしても、この砲弾の着弾地点は勝田の集落まで約1kmという至近距離であり、極めて危険な状況であったことが伺える。しかし、聞きとり調査によると「・・見習い士官などのまだ新米の兵隊は、標準(照準か)をあやまって弾が畔田の方まで行ってしまったりした。農地に落ちたりして農作業に危険をともなった。」(注6)と現実には誤射による差し迫った多くの危険があったことが伺える。

この砲弾が使用された時期については、信管の型式が「三年式複動信管」であることから、大正3年(1914)に制式制定された以降に行われた射撃訓練などで使用されたものと推定される。この榴散弾という砲弾は日露戦争(1904～05)のころまでは榴弾よりも数多く使用されていたが、第1次世界大戦(1914～18)以降はあまり実戦では使用されなくなっていた(注7)。しかし、その後も終戦まで射撃訓練には利用されていたようである。

この信管を用いた砲弾である「三八式榴散弾」という弾種は、四一式山砲(明治44年制式制定)、改造三八式野砲(大正15年制式制定)、九四式山砲(昭和10年制式制定)、九五式野砲(昭和11年制式制定)などで使用されている(注5)。これらの砲の口径はいずれも75mmであり、砲弾の弾体から推定された径とほぼ一致する。

(注1) 八千代市教育委員会 2003 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』

(注2) 八千代市遺跡調査会 2004 『千葉県八千代市新東原遺跡a地点発掘調査報告書 一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査―』

(注3) 八千代市教育委員会 2004 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』

(注4) 八千代市教育委員会 2005 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』

(注5) 竹内昭/佐山次郎 1986 『日本の大砲』

(注6) 矢部壽枝 2004 『四街道市街地の発生と発展 二』『市史研究誌 四街道の歴史』第2号

(注7) 桑田小四郎 1953 『火砲弾薬用信管の發達』『陸戦兵器の全貌(上)』

図版3 新東原遺跡 e 地点 (1)



(1) 調査区域近景



(2) 調査区域近景



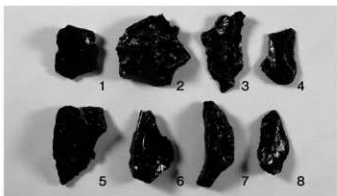
(3) 調査区土層



(4) 旧石器調査状況



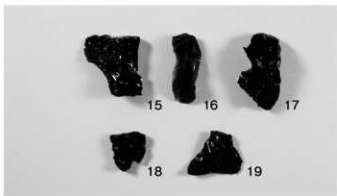
(5) 旧石器調査状況



(6) 旧石器調査遺物①

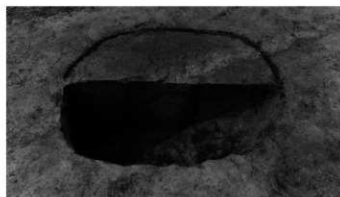


(7) 旧石器調査遺物②



(8) 旧石器調査遺物③

図版4 新東原遺跡e地点 (2)



(1) 1号土坑 (01P)



(2) 2号土坑 (02P)



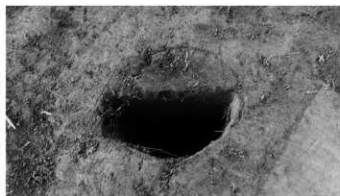
(3) 3号土坑 (03P)



(4) 4号土坑 (04P)



(5) 5号土坑 (05P)



(6) 6号土坑 (06P)

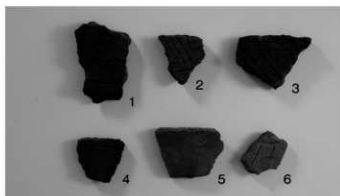


(7) 7号土坑 (07P)

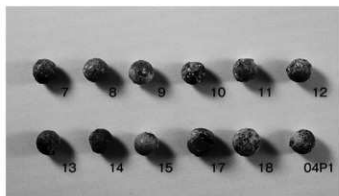


(8) 8号土坑 (08P)

図版5 新東原遺跡 e地点 (3)



(1) 出土遺物①



(2) 出土遺物②



(3) 出土遺物③



(4) 出土遺物④



(5) 出土遺物⑤



(6) 調査風景



(7) 調査風景



(8) 調査風景

## 4. 新東原遺跡 f 地点

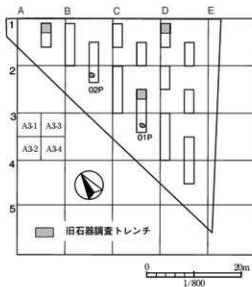
## 遺跡の立地と概要

調査区は遺跡の中央、e 地点の南側に位置している。標高は24m前後の平坦面に立地する。現況は荒蕪地で、遺物の散布は確認できなかったが、南西約50mのところにFNN地点と呼ばれる遺物出土地点があり(注2)、また現地踏査においても東側の畑地で土師器等の散布が若干見られた。そのため、南東側に突き出た舌状台地の先端部にも近づく本遺跡の一端が検出されることが期待された。

## 調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッドを組んだのち、これに平行する形で2m×5mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に119mについて表土除去・遺構検出作業を行った。また、旧石器時代調査トレンチを3ヶ所12m設定し、掘削を行った。

調査期間は平成16年12月8日～28日である。12月8日基本杭設定・トレンチ設定・重機によるトレンチ表土除去、8日～9日遺構検出作業・撮影等記録作業、16日土層の調査、17日遺構調査、17日～20日人力による下層の調査、22日重機によるトレンチ埋め戻し作業を行い、28日に調査を終了した。

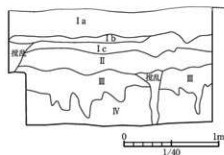


第19図 f 地点遺構検出状況

— h=25.50m

## 調査の概要

調査区の現況は荒地となっているが、以前は畑地として利用されていたようだ。I a 層・I b 層・I c 層は盛土層、II 層が褐色土のローム漸移層、III 層がソフトローム層、IV 層がハードローム層に分層される。盛土は調査区域全体に30cm～40cmほどの厚さでみられた。また、攪乱がローム面にまで達していたが、遺構の確認はソフトローム上面で行った。落ち込みは4ヶ所検出されたが、覆土の状況から土坑2基を調査した。1号土坑の覆土中から弾子が6点、2号土坑からは弾体の破片6点と弾子1点が出土した。これらの土坑は砲弾による落ち込みの可能性もある。



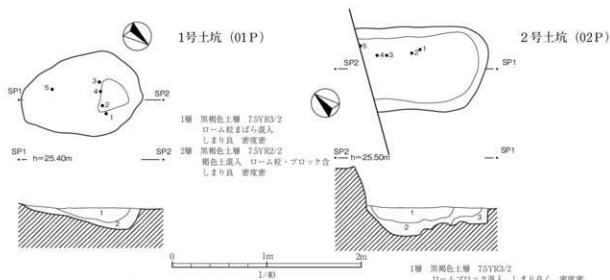
- I a 層 表土層(盛土層) しまり良 密度疎  
 I b 層 盛土層 ローム、粘土、砂利などの混入 しまり良 密度極密  
 I c 層 盛土層 褐色土 しまり良 密度極密  
 II 層 ローム漸移層 褐色土 黒褐色土のしみ しまり良 密度中  
 III 層 ソフトローム層  
 IV 層 ハードローム層

第20図 D1-1トレンチ西壁土層

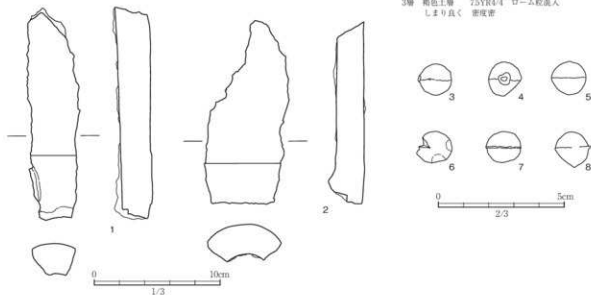
第8表 f 地点遺構一覧表(第21回)

( ) 推定 ( ) 現存

遺構No.	種別	規模(cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	検出位置	備考
		長軸	短軸	深さ					
O1P	土坑	129	88	30	楕円形	N-43° -W	凹凸	C3-3	弾子6点
O2P	土坑	(128)	90	23	長楕円形	N-42° -W	皿状	B2-3	弾子1点、弾体破片6点



第21図 f地点検出遺構



第22図 f地点出土遺物

第9表 f地点出土遺物一覧表 (第22図)

図版No.	出土地点	種別	特徴	大きさ(mm)	重量(g)	備考
1	D1-1	弾体(破片)	破片下半に地線があり、弾体下部とみられる。内側下部には弾底部分の残りが施される。	径 推定70	5448	
2	2号土坑 No5	弾体(破片)	破片下部に地線があり、弾体下部とみられる。内側下部には弾底部分の残りが施される。	径 推定70	6863	
3	D3-4	弾子	はみ出し痕、切り離し面も2ヶ所	径13	100	
4	A1-3	弾子	はみ出し痕、切り離し痕がみられ、一部平坦にカット	径13	101	
5	C2-4	弾子	はみ出し痕がみられ、切り離し痕	径14	104	
6	1号土坑 No1	弾子	はみ出し痕がかすかにみられる。一部大きく剥られ、形状も変形している。	径14	104	
7	1号土坑 No2	弾子	はみ出し痕が粗い。切り離し痕もみられる。	径14	102	
8	2号土坑 No4	弾子	はみ出し痕が不鮮明。一部平坦にカット	径14	106	

また、トレンチ及び表採でも砲弾の弾体の破片6点、弾子8点が出土している。弾体の破片はいずれも外周の径が約70mmであり、e地点の砲弾の破片と同様のものとみられる。弾子も総数15点出土しているが

重量は9.2gから10.6gと10g前後に調整されて製作されている。製作方法も同様で型への流し込みによるものと判断される。土器及び旧石器の出土はまったく見られなかった。

#### 調査のまとめ

今回の調査区内からの遺物は、近代における砲弾の破片のみであった。内容的には前述の e 地点で出土した旧陸軍による射撃演習時の砲弾の破片と同一であり、この台地一帯が標的または誤射により砲弾（榴散弾）の着弾地点となっていたことが一層明らかとなった。

新東原遺跡の全体像は多様性に富んでいるが、その中でも e・f 地点ともに近代における勝田周辺の姿を明らかにする興味ある資料を提供してくれた。

（注）この項の参考文献は前項の3新東原遺跡 e 地点のものと同じである。

図版6 新東原遺跡 f 地点



(1) 調査区域近景



(2) D1-1トレンチ西壁土層



(3) 1号土坑



(4) 2号土坑



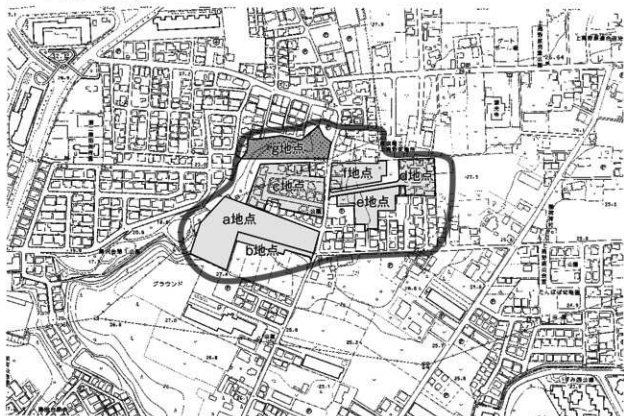
(5) 出土遺物①



(6) 出土遺物②



## 5. 二重堀遺跡 g 地点



第23図 二重堀遺跡位置図 (S=1:5,000)

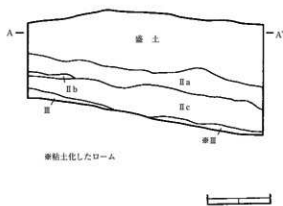
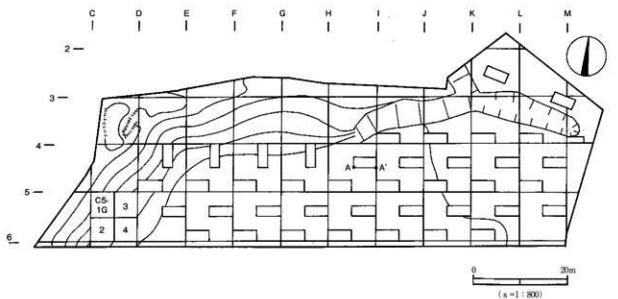
### 遺跡の立地と概要

二重堀遺跡は、市城南東部、新川と小竹川に挟まれた台地のほぼ中央部で、新川に至る谷津の最奥部、標高約24～27mの台地上平坦部に位置する。二重堀遺跡のこれまでの調査は、平成5年度のa地点において縄文時代前期浮島期の竪穴状遺構1基、土坑35基、平成6年度のb地点では、a地点と同時代の土坑2基、平成8年度のc地点では縄文時代前・中・後期の土器小片が出土したのみで遺構は検出されなかった。同年度のd地点では時期不明の溝状遺構1条、土坑1基、平成13年度のe地点では、縄文時代早期の炉穴4基、後期の土坑1基、縄文時代の小竪穴状遺構1基、土坑3基等が、平成15年度のf地点では中近世以降の溝状遺構1条が検出されたのみである。今回の調査地はf地点の西側及びc地点の北側で標高約24mの台地上緑辺部～平坦部に立地する。伐採後の地形上の観察では、不自然な等高線上の斜面、平坦面やローム土が見られ、切土・盛土等の土地の改変が想定された。

### 調査の方法と経過

調査は調査区の形状に合わせて10mのグリッド(方眼)を設定し、これに平行する形で2m×5mのトレンチを10m間隔で配置し、遺構の確認に努めた。

調査は平成16年12月20日～12月28日の期間で実施した。12月20日機材搬入等環境整備及びトレンチ設定、21日トレンチ設定及び重機によるトレンチ内表土除去、22日重機によるトレンチ内表土除去作業のみの実施、24日重機掘り下げ後の人力によるトレンチ内精査を行う。27日にトレンチ土層断面図等実測作業、28日機材撤収及び重機によるトレンチ埋め戻しを行い調査の全工程を終了した。



粘土 細砂粒、長石、石英、雲母  
 赤色粒  
 構成 硬く締まる  
 色調 外面 暗褐色 部分的黒褐色  
 内面 暗赤褐色  
 調整 外面 ナテ  
 内面 ナテ後ミザキ



粘土  
 構成 1:1と同様  
 調整  
 色調 内外面 茶褐色  
 1・2共にF4.3C出士

第25図 土層断面図

## 調査の概要

本遺跡の基本層序は、西側の台地先端部及び緩傾斜面ではI盛土による表土層、II a黒色土、II b褐色土（新期テフラ層）、II c暗褐色土、IIIソフトローム層となっている。東側の谷を埋めた平坦面では、1.5m～3mの盛土下に黒色土、更に橙灰色粘土の層順となっている。遺構確認は、III層上面において行った。

調査の結果、遺構は検出されなかった。遺物は無文の口辺部及び胴部片の2点のみで、同一個体と考えられる。時期の特定はむずかしいが、縄文後期前半か。

## 調査のまとめ

今回の調査では遺構は検出されなかった。前述したが、地形は盛土による改変を受けていることがわかった。西側の台地先端部は現況基盤に若干の盛土が見られるが、中央から東側では、谷であった地形に盛土して平坦面としていた。この谷は、過去において水が湧いていたことが知られており、現にトレンチ掘削時に黒色土下で水が湧いている。

二重堀遺跡については、今回の調査でその遺跡エリア内を網羅したと言えよう。結果として、遺跡の南側と東側において縄文早期後半、前期後半から中期前半、後期前半と断続的に今回調査の谷部を拠点とした集落展開ないし土地利用が想定されよう。

参考文献

- |       |           |      |                             |
|-------|-----------|------|-----------------------------|
| a地点   | 八千代市教育委員会 | 1995 | 『平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報』       |
| b地点   | 八千代市教育委員会 | 1995 | 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成6年度』  |
| c、d地点 | 八千代市教育委員会 | 1997 | 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』  |
| e地点   | 八千代市教育委員会 | 2003 | 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』 |
| f地点   | 八千代市教育委員会 | 2005 | 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』 |

図版7 二重堀遺跡g地点



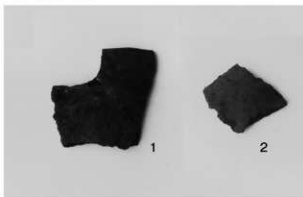
(1) 調査区域近景



(2) 調査区土層



(3) 調査風景



(4) 出土土器

## 6. 内野遺跡

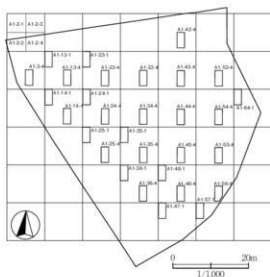
## 遺跡の立地と概要

内野遺跡は、市域の西部に位置する。内野の台地は北側を桑納川に、西側を石神谷津に、東側を花輪谷津によってそれぞれ囲まれた、北西-南東方向約700m、北東-南西方向約2.300mの細長い台地である。この台地の東側やや北寄りに、花輪谷津から西に入る小谷がある。内野遺跡はこの小谷の南側に位置し、花輪谷津に臨む遺跡の一つとして認識されている。遺跡内に残る畑地では、少量であるが土師器片などを採集することができる。標高は20~26.6mである。

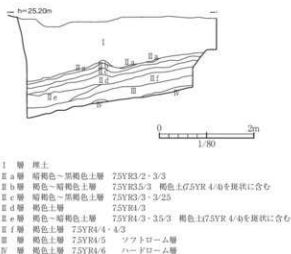
今回の調査対象地は、この小谷からやや南に奥まった台地上である。現況は、工場跡地の荒撫地で、コンクリートや礫等に覆われ、土の地面はほとんど確認できない状態であった。東に隣接する土地よりも低く、約1mの段差がある。標高25m前後の平坦な土地である。表面採集では、調査地の南東方向にある畑地で、土師器片を数点得た。調査地内では、基石型の泥面子1点を得たが、現況から考えて元からこの土地にあったものとは判断しがたい。



第27図 内野遺跡位置図 (1/5,000)



第28図 トレンチ配置図



第29図 A1-14-4グリッド東壁土層図

### 調査の方法と経過

調査地を概ね東西南北に合わせて方眼に区切り、それを基準として東西2m、南北5m前後規模のトレンチを30箇所、約240㎡分設定し掘削した（第28図）。トレンチの命名法は、対象地全体を100m四方の大グリッドA1Gr.とし、その中を10m四方の中グリッドに、さらにその中を5m四方の小グリッドに区分するという、当市の標準的な方法に従った。

調査期間は平成17年1月7日～17日である。7日トレンチ設定、11日～13日重機表土剥ぎ及び遺構検出作業、12日～13日土層調査及び図面作成、14日～15日重機による埋め戻し、14日・17日器材撤収等を行った。

### 調査の概要

掘削の結果、調査地は埋め立て地であり、しかも少なくとも約90%の部分で埋土が厚さ2m以上に及ぶということがわかった。埋土中にはコンクリートやアスファルトや金属片等が含まれ、重機をもってしても掘削は難航した。

地山が検出されたのは、調査地南西部のA1-14-4（以下A1は省略）・25-1・25-4・36-1・46-4の5箇所のみであった。14-4・25-1・25-4・36-1は隣り合い、最も北西に位置する14-4では北が低く南に向かって高くなる地形が観察された（第28図）。それに続く25-1・25-4・36-1では地表下0.6～0.85mでローム層が検出され、その上層は埋土であったため、削られた後に埋められたことがわかった。ATを含むVI層の標高で見ても、14-4では23.0～23.6mで、前述したとおり北から南へ高くなり、25-1・25-4・36-1で24.3m前後となる。これらの東南方向に位置する46-4では地表下2.1～2.3mで灰褐色土が検出され、褐色土を斑状に含む暗褐色土・褐色土を経て2.6mでソフトローム層に至った。現在よりも地盤が2m程低かった所を埋め立てたことがわかった。ソフトローム層の標高は22.4mで、25-1・25-4・36-1付近よりも約2m低かったことになり、東南方向にも傾斜していたことがわかる。

以上から、調査地にはかつて谷が及んでいたものであり、それは北方にある小谷から続いていたものと見られる。調査地の北～北西に隣接する土地もほとんどが埋め立て地である。調査地における埋め立て等の地形改変は、昭和60年以前のころらしく、当時の都市図によると、調査地は標高24.8mの平坦地となっており、その北側にはまだ谷地形が残っていたようである。

埋め立てと破壊が著しく、遺構は検出されなかった。遺物は14-1において縄文土器の小片1点を得たのみである。このトレンチでは深さ1.5mでローム質の土が検出され、そこで土器片が出土したが、この土も不自然に褐色土が混じるもので埋土と判断した。

### 調査のまとめ

内野の台地の北の先端部には、中世城郭の吉橋城跡がある。実際の城の範囲は広大と想定され、内野遺跡に関わる小谷の北に鎮座する吉橋八幡神社付近が、この城の大手門と捉えられている（注1）。それを裏付けるように、この範囲内にある妙見前遺跡では、堀跡・溝・地形整形遺構が検出され、15世紀後半の常滑焼の鉢・甕・大甕が出土している（注2）。その南に接する洪内遺跡では、室町時代と考えられる地下式横穴が11基検出されている（注3）。市域を代表する中世遺跡の南に隣接するのが内野遺跡であり、有望な遺跡ということになるが、今回の調査地では主に地形に関する情報を得たのみであった。今後の調査に期待したい。

(注1) 八千代市教育委員会・八千代市中世館城址調査団（1976）「八千代市中世館城址調査報告」

(注2) 八千代市教育委員会（2003）「千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書」

(注3) 八千代市教育委員会（1983）「千葉県八千代市北部遺跡群発掘調査報告書」

図版8 内野遺跡



(1) 調査区近景



(2) トレンチ掘削状況



(3) A1-64-1グリッド土層堆積状況



(4) A1-14-4グリッド東壁土層



(5) A1-36-1グリッド ローム検出状況



(6) A1-25-1グリッド ローム検出状況

## 7. 持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点

## 遺跡の立地と概要

調査区が二つの遺跡にまたがっているため、両遺跡名を併記することとした。持田遺跡は市域の中央部、新川の東岸の台地上に立地している。標高24m～26mほどである。正覚院館跡は南側に開けた小さな谷津を取り囲むように造られている。

## 調査の方法と経過

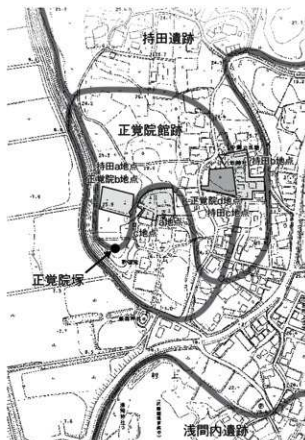
確認調査は平成16年3月9日から18日であった。調査終了後、平成16年7月1日午前、宅地造成に伴う排水管理設工事中に人骨が出土し、工事関係者は警察に連絡した。警察官は市立郷土博物館に問い合わせ、郷土博物館から八千代市教育委員会生涯学習課に連絡するという経過をたどった。当課は現地において、中近世の骨蔵器であると判断し埋蔵文化財として対処することとなった。

発掘調査はすでに終了していたが、新たな発見として事業者及び工事業者の承諾を得て、同日午後骨蔵器が出土した周辺部分の緊急調査を行った。

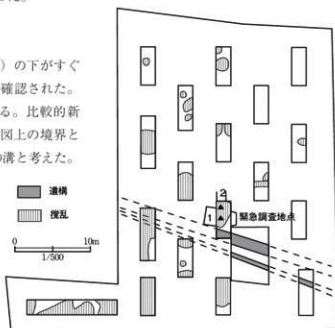
## 調査の概要

確認調査において、土層は表土（旧耕作土）の下がすぐにソフトローム層で、70cm～100cmの深さで確認された。遺構は調査区南側から溝が2条検出されている。比較的新しいものと考えられ、近世以降と判断し、公園上の境界と平行して作られていることから、土地の境界の溝と考えた。

工事中に出土したものは、第31図の1の地点から人骨が入られた陶器の骨蔵器1点(32図1)と第31図の2の地点から青銅器2点(32図2.3)であった。出土位置については工事関係者の証言によるが、多少のずれはあるとみられる。出土した深さについては排水管理設用の溝の深さが約1.2～1.3mほどあり、ローム面以下であった可能性もあるが不明である(注1)。出土地点については正確な測量は行われていないが、緊急調査時の概略図で判断すると攪乱の位置などからほぼこのような位置であったとみられる。工事関係者が「新しく埋めたような土ではないところから出た」と証言しているため、当初トレンチとトレンチの間から出土したと考えたが、攪乱の内部から出土した可能性もあるのではないだろうか。周辺に拡張した区域を精査したが、

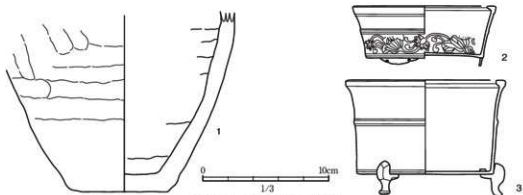


第30図 持田遺跡・正覚院館跡位置図(1/5,000)



第31図 確認調査及緊急調査状況

緊急調査時の概略図で判断すると攪乱の位置などからほぼこのような位置であったとみられる。工事関係者が「新しく埋めたような土ではないところから出た」と証言しているため、当初トレンチとトレンチの間から出土したと考えたが、攪乱の内部から出土した可能性もあるのではないだろうか。周辺に拡張した区域を精査したが、



第32図 緊急調査出土遺物

攪乱以外、遺構を確認することはできなかった。また、掘りあげた廃土を確認したが出土した以外の人骨片はなかった。廃土中から土師器や陶器の破片は9点ほど出土している。

### 調査のまとめ

本地点が近世の溝のみであったという認識は修正する必要がある。骨蔵器の年代は上半部が欠損しているため時期を特定することは難しく、また、本来の使用目的後に骨蔵器として用いられた可能性もあり、時期を特定することはさらに困難であるが、鎌倉時代後半以降に骨蔵器として再利用されたものとみられる。正確な位置や深さを特定することはできなかったが、2点の青銅製香炉も含めて、攪乱とみられた落ち込み内から出土した可能性もある。

第10表 緊急調査時出土遺物一覧表 (第32図)

( ) 現存 ( ) 復元

図版No.	出土地点	種別・部種・部位	成形・整形・文様等	口径・底径・高さ(cm)	色調・胎土	備考
1	D4周辺	常滑 甕 胴下半部	胴部中には縦方向のナデ。下位は横位のナデによる成形	---7.8 (14.3)	灰 濁赤褐色(SYK3/4) 石英砂粒	鎌倉時代後半 内部に人骨を収納
2	D4周辺	金属器 香炉	体部に2段に区切り。下段に蓮の花の文様が彫刻される。脚は3足	11.5・9.4・4.7 (脚高 0.6)	青銅製	
3	D4周辺	金属器 香炉	体部に2段に区切るが、文様はない。脚は3足。根脚様の脚を底に穴を空け取りつけ	12.8・10.9・9.1 (脚高 1.7)	青銅製	

(注1) 平成16年度の市内遺跡報告書において深さや位置についてすでに報告されているが、再度資料の確認を行った結果、上記のとおり訂正する。

(注2) 陶器の時期については鳴田氏のご教授による。また、「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」の報告の中の第61図2は播鉢で15世紀後半、4はカワラケで1400年前後との指摘を受けている。このことからこの地点が15世紀ごろの遺跡であることを示唆している。

参考文献 八千代市教育委員会・八千代市中世館城址調査団 1976 『八千代市中世館城址調査報告』  
八千代市教育委員会 1996 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成7年度』  
八千代市遺跡調査会 1999 『千葉県八千代市正覚院館跡 一埋蔵文化財発掘調査報告書一』  
八千代市教育委員会 2005 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度』

図版9 持田遺跡c地点・正覚院館跡d地点緊急調査



(1) 出土遺物1



(2) 出土遺物2



(3) 出土遺物3



# 報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし しなにいせきはくつちょうきょうこくしよ へいせい17ねんど		
書名	千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成17年度		
編著者名	秋山利光 森哉哉 常松成人		
編集機関	八千代市教育委員会		
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2	Tel 047-483-1151 内6114	
発行年月日	西暦2006 (平成18年) 3月24日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	道路 番号					
一本松前遺跡 c地点	八千代市大和田新田字 一本松前127-1 の一部	12221	174	35° 43' 07"	140° 05' 28"	20041014 ～ 20041029	確認調査 上層 308㎡/3,300㎡ 下層 228㎡/3,300㎡	宅地造成
東山久保遺跡 b地点	八千代市鳩田字東山 久保989-1 の一部	12221	24	35° 46' 02"	140° 06' 15"	20041108 ～ 20041126	確認調査 上層 376㎡/2,978.07㎡	宅地造成
新東原遺跡 e地点	八千代市勝田字新東原 1280, 1283-2, 1284, 1291-8 の一部	12221	259	35° 41' 54"	140° 08' 25"	20041129 ～ 20041228	確認調査 上層 1,060㎡/9,574㎡ 下層 189.5㎡/9,574㎡	宅地造成
新東原遺跡 f地点	八千代市勝田字新東原 1257-1	12221	259	35° 41' 50"	140° 08' 25"	20041208 ～ 20041228	確認調査 上層 119㎡/1,153㎡ 下層 12㎡/1,153㎡	宅地造成
二原嶺遺跡 g地点	八千代市上高野字新林 1212, 1213, 1217-1, 1217-2, 1217-3, 1218-1, 1218-3	12221	231	35° 43' 10"	140° 08' 03"	20041220 ～ 20041228	確認調査 上層 328㎡/3,727.95㎡ 下層 8㎡/3,727.95㎡	共同住宅建設
内野遺跡	八千代市吉橋字八幡前 1176-1 の一部、1178-2 の一部	12221	138	35° 44' 13"	140° 05' 06"	20050107 ～ 20050117	確認調査 上層 240㎡/2,823.26㎡	宅地造成
持田遺跡 c地点・ 正覚院船跡 d地点	八千代市村上字松葉 1193-2, 1195-2	12221	200 201	35° 43' 22" (注)	140° 07' 10"	20040701 ～ 20040701	緊急調査 4㎡/1,242.22㎡	宅地造成

(注) 八千代市教育委員会 2005 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」に記載された北緯に誤りがあったので訂正します。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一本松前遺跡 c地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器 (中期)	
東山久保遺跡 b地点	集落跡	縄文時代 古墳時代	古墳時代住居跡 岡	2軒 1基 縄文土器 (前期末～晩期) 土師器 (古墳時代)	
新東原遺跡 e地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 近代	旧石器出土地点 時代不明土坑	1ヶ所 8基 旧石器 縄文土器 (後期) 近代 (砲弾破片、信管、弾子ほか)	
新東原遺跡 f地点	包蔵地	近代	時期不明土坑	2基 近代 (砲弾破片・弾子)	
二原嶺遺跡 g地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器	
内野遺跡	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器	
持田遺跡 c地点・ 船跡 d地点	集落跡 船跡	古墳時代 中世	なし	陶器 (人骨) 金属器 須恵器	緊急調査

千葉県八千代市  
市内遺跡発掘調査報告書

平成17年度

平成18年3月24日発行

発行 八千代市教育委員会 生涯学習部生涯学習課

〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2

TEL・047-483-1151

印刷 有限会社フジ印刷

〒276-0047 千葉県八千代市吉橋1189-5